

編曲者意図を的確に表す記号体系の提案

松本光明

本研究は、アレンジ・編曲された楽譜(以降、編曲譜)を対象に、編曲者が持つ編曲意図が、楽譜中にどのように記入され、どのように演奏者へと伝わるかを調査する。また、編曲者の意図が楽譜を通じて演奏者へと伝わるプロセスを調査し、その結果に基づき、従来よりも編曲者の意図を明示できる「記号」を作成する。

演奏者は、楽譜に記された音や記号をもとに楽曲を演奏するが、楽譜の作成者である作曲家・編曲者の意図は、楽譜上の楽音・音楽記号を通じてのみ伝えられる。編曲者の意図を元にした視覚的な記号を用いることで、作成者側の意図を、視覚的かつ直感的に演奏者側へと伝達することが可能となる。作曲家の意思決定のモデルに関する研究はすでに行われているが、本研究で対象とする編曲者の意図に関する記号化は初期段階にあり、また、本研究で対象とする混声無伴奏合唱譜についての研究は見当たらない。

まず、筆者が編曲した童謡2曲(「ふるさと」、「もみじ」)について楽譜分析を行い、記号案を作成した。音楽の3要素(旋律・和音・リズム)、コード進行(原曲コード・リハーモナイズ)、前後の楽音との関係(連続的・選択的)、選択した理由(理論的・感性的)を分析し、編曲意図を記述するための記号体系を作成した。本記号体系では、音楽の3要素による色分け、分析時の語句に合わせた視覚的記号、その他編曲意図に合わせた記号、を複合的に用いる。

この記号体系を用いて、演奏者を対象としたアンケート調査を実施し、作成した記号の有用性の検証や改善を行った。アンケート調査では、記号の付与されていない楽譜と、付与されている楽譜について、それぞれ編曲者の意図が楽譜中のどの部分に含まれているかを調べた。音楽の3要素(旋律・和音・リズム)は多肢選択式(複数回答可)、選択要素については自由記述とした。さらに、記号の有効性を計測するため、記号作成時に用いた編曲者による分析済みチェックリストを(1)配布した場合と(2)しない場合について比較した。

被験者34名を対象とした調査の結果、「ふるさと」と「もみじ」の両楽曲において、合計得点が平均で約2倍増加し、減少は2名のみだった。また、編曲者チェックリストの配布の有無を比較すると、合計得点の減少者数は、(1)配布なしでは18名中1名のみ、(2)配布ありの被験者も16名中1名のみであった。また、得点が増加した割合の平均をみると、(1)配布なし(2)配布なしどちらもほぼ同程度であった。以上のことから、記号の付与が被験者の楽譜の読み取りと解釈に有用であり、本記号体系は編曲者の意図をより正確に読み取ることを可能にする。また、編曲者チェックリスト配布による理解度の変化は見られなかったことから、記号のみの付与でも十分に編曲者の意図を伝達できている。よって、本研究で作成した記号は編曲者の意図を視覚的かつ直感的に表現できる。

(指導教員 真栄城哲也)